

# 第3版の序

管理栄養士、栄養士にとって、「臨床医学」を学ぶ意義は、栄養を理解するうえで基本となる学問であるところにある。かつて栄養学は「栄養素」を中心に化学的なアプローチとして、そして「家政学」を元に「調理学」として教えられてきた時代があった。もちろん、食事においてこれらは重要であるが、動脈硬化や発がん、そしてこれらの危険因子となる糖尿病、脂質異常症、高血圧、肥満症、さらには加齢とともに進行する筋力低下や誤嚥などへの深い理解が要求されるようになった。近年の管理栄養士国家試験をみても、この流れを組み入れ、「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」、「基礎栄養学」、「臨床栄養学」から「応用力試験」にいたるまで、「臨床医学」に関連する項目が大きなウエイトを占めるようになってきている。医療機関では、管理栄養士、栄養士は、医師や看護師など医療スタッフとともにチーム医療の重要なポジションを占める職種としてみなされている。

「臨床医学」は、具体的には、疾病がどのようなメカニズムで発症するのか、疾病により人体の構造や代謝が健常者と比較してどのように変化するのか、疾病によりどのような症状・合併症がみられるのか、疾病を診断するにはどのような検査を行い、どのような検査結果を認めるのか、そして、疾病の治療全般（食事・栄養療法、運動療法、薬物療法、外科療法、その他の療法）はどうなっているかを学ぶ学問である。このテキストはそういった背景を踏まえ、初版から、「解剖生理学」、「生化学」などの基礎的な学問から「臨床栄養学」、「栄養管理学」、「栄養教育」などの実地臨床を学ぶ学問への橋渡しとなる基本的な知識が執筆されている。

本書は、各章のはじめに、その章の最も重要な点を「Point」として箇条書きで示し、概略図に重要な点を示して要点を把握できるようにしている。また、各章に関連して、「臨床栄養への入門」として、管理栄養士がかかわる重要な疾患の栄養管理についてイメージできるように解説した。記述の中で特に説明を要する語句については、脚注として解説し、重要な内容については可能な限り図表で示すようにして、理解しやすいように努めた。各章の終わりには、理解すべき重要点について、「チェック問題」を掲載し、解答と詳しい解説を載せているので、是非、活用していただきたい。

本書は初版が2011年、改訂第2版が2015年に出版されたが、このたび、その後の管理栄養士国家試験出題基準（ガイドライン）の改定、各疾患の診療ガイドラインの更新の内容を取り入れた『臨床医学 疾病の成り立ち 第3版』を新たに出版することになった。また前回の改訂第2版の章立てに「感染症」を新たに追加している。本書が読者の「臨床医学」の学習に役立つことを願っている。

2021年10月

田中 明  
藤岡由夫